

# びわこの 考湖学

8

# 信玄の伝説：「我が旗を立てよ」

琵琶湖を考える上で非常に重要な要素である瀬田橋。これから3回にわたって、瀬田橋について話をすることにします。

瀬田川にかかる唐橋の下流約80㍍の川底で、奈良時代から中世まで4期の橋脚遺構が発見されました。滋賀県のお家芸ともいえる潛水調査によって見つけられたものです。

最も古いものは、川底を

丁寧に整地した後、カシの丸太材を縦横に並べて基礎

とし、その上に約45㌢角、

長さ約6㍍のヒノキ材6本

を扁平な六角形に組み、浮き上がりを防ぐため多量の石が載せられていました。

こうした土台の上に橋脚を立てていたのです。

この橋脚は、当時の日本

では例を見ない構造で、新

羅王京である慶州(現在の韓国・慶州)で7世紀後半

に構築された月精橋に類例

うとします。しかし、それ

で幕府軍が勝利を収めたことができたのでした。その後、上皇軍が瀬田橋の防御を解くや幕府軍が京都へなれ込んだといいます。建武3(1336)年には足利直義らと名和長年らが瀬田橋で合戦しています。

瀬田橋の軍事上の重要性を物語るには、本能寺の変の事例が参考になるので詳しく見てみましょう。瀬田橋東詰に山岡景隆の瀬田城がありました。織田信長恩顧の景隆は、本能寺で信長を討った明智光秀が京都から安土城に入ろうとしていることを察知。事前に橋を落とし、居城に火を放つて落としたことをこもります。

山中にこもります。光秀は橋の西詰で立ち往生した末に、居城坂本城へ生した末に、居城坂本城へと引き返し、4日間の足止めを食いました。最終的に

軍事以外のエピソードでは、京都(平安京)から伊勢斎宮への斎王群行が利用していますし、建久6(1195)年に東大寺落慶供養で上洛した源頼朝も渡っています。いずれも数百人からなる行列でした。

小人数で渡った人々もいましたが、さほど目立ちません。一方で、寛仁4(1020)年12月、「更級日記」の作者、菅原孝標の女が「勢多の橋みなくづれて、わたりわざらる」と記しているように、橋が落ちていて渡れなかつたとする記事は幾つか見られます。

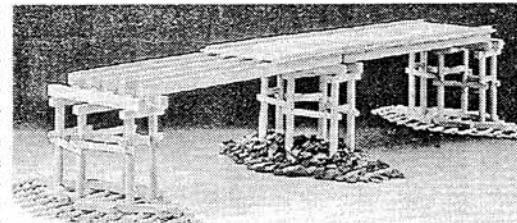
恒常的な管理は難しかったことがうかがわれます。

(滋賀県文化財保護協会 畑中英)



瀬田の唐橋 復元模型

## 瀬田の唐橋 その1



瀬田の唐橋 遺構

寿永2(1183)年7月

光秀が源氏の太田次郎兼定と

倉光冠者が平知盛と橋を挟んで合戦。翌寿永3年1月

には、源義仲が源範頼との

合戦に備え、今井四郎兼平

を瀬田橋に配しました。

承久3(1221)年の

承久の乱でも、橋をめぐる攻防がありました。後鳥羽

上皇軍の防衛戦のひとつが

間に秀吉は巻き返しを図る



奈良時代ごろの唐橋橋脚台の遺構。現在の唐橋

の約80㍍下流で発掘された。(滋賀県文化財保護協会)